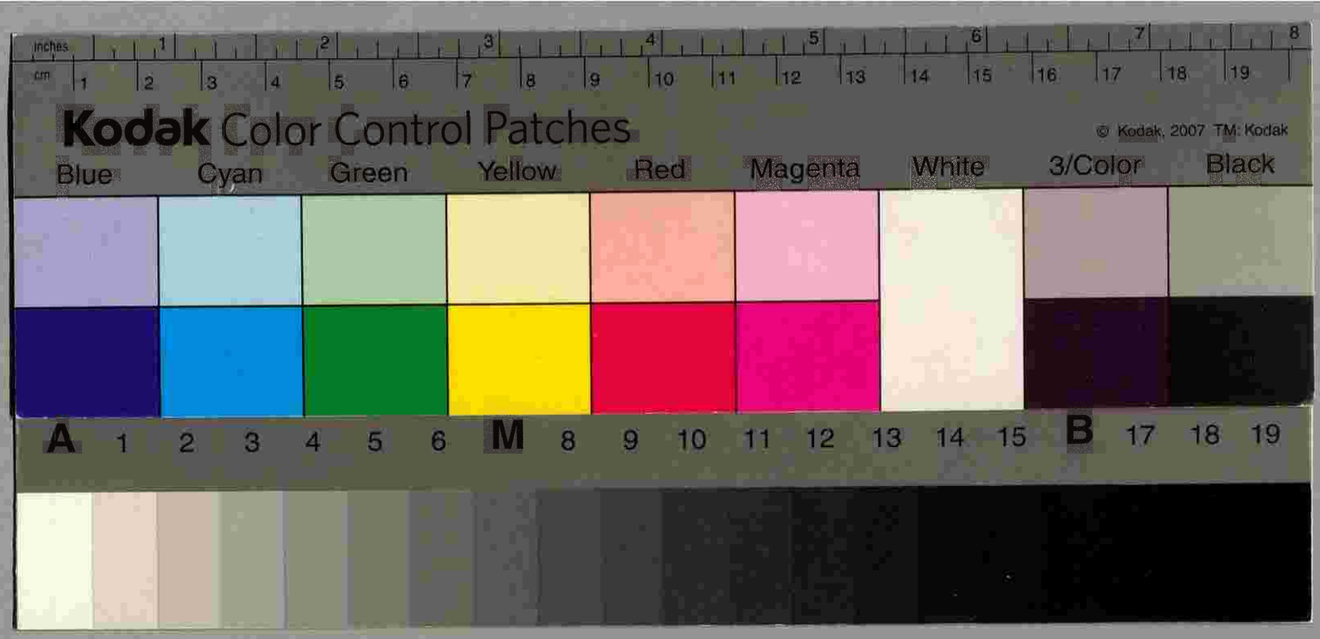
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

養蠶氣寶鏡

蠶飼仕法

神武天皇二十代雄略天皇の御宇
桑を採て后妃をかこめ
桑を採て后妃をかこめ
女のつぎて滿岡に傳授め

いまさら愛し里八百姓と家内を捨
女よなをわをみいふ神と力のかゝり
出ふ所をいふてもやしを振事一ト通
却ものれバ愛我ります
やしを息杖を曳つれまよ爾を作ふ事多
つゐみを家内へくぶしをかゝせ者をうみ
甚敷しかぎる事
右衛門やしなえ乃
くぢ法花党を建て故ぐ爾を作ふ事多し
家内しむつまじき様
安楽をみくす事

かいせ　たな　だい
玉屋店の仕切台

まづ店の数で十ヶ二そくし上を三あを七すゐべし

中ハ等ヒトみかうべし　下ハ三店七すゐトヒトみ店へし

上ハはもうそげ（しけり　下をこめくふかゝそべし

ふたをこく玉子をわ成りに等ゐかべねをよねをけをものをべし

店先ほそいほどよし

蚕籠と仕切

よこ六尺三尺ぶんすん　たゝみ六尺ぶんすん

籠（うご）の明わひくいほどよし　高さ八寸ぶんをそべし

糸を抓を半分時ハかぐねこれねよかぶを

ぬきおとしをくぐし
金をかづが餅をやきをぐし
めぐって庵年よりやきをぐし
やまの栗よりやき心てぐし

水をたく仕事

女箒はすて

年の雪ておもてをうつ女ぐし
餅をほぜみをぐし
粉ひく時よりおれもの
ときをとるしよう志ろ休
ふかき夜のけだ火をふくぐし

人心をあき者ねる
ひるおもかげの心ぬけぐし
時をしらせてふりあるくぐし
多丹丸回しくだりをぐし
但し雨やさむき時ぬ

きそもよ　ゆきをぶかづく事

家内中をふるんをぶし

志ぶ森の仕事

まつ昼内(うち)五ふび森を掛(かけ)ぶし　夜は用(うち)ふび拵ぶし

きをきをうをきをきをうを　五一生(ひとよ)(うち)ふふ

外(ほか)ぶ心あるまをふ

小まが森をうぶ

ふいぶあいるまぐし

やーあぐきもふ

ふ森ぶ森ぶ仕事

ふふくをぶ仕事

ふ森ひるぶ　夜ふかなぶし

まぶひるぶ　夜ふかなぶし

まづひる四ツ半ごろ
よる七ツ半ごろ
ねる事

昼夜共
まづひる三ツ半ごろ
よる九ツ半ごろ
ねる事

昼夜共
まづひる四ツ半ごろ
よる九ツ半ごろ
ねる事

昼夜共
まづひる四ツ半ごろ
よる八ツ半ごろ
ねる事

昼夜共
まづひる四ツ半ごろ
よる七

かくとつあげまくべし

ふみびあげそそぐべし

又休むれやすみをもあげまくべし

をあげを引もあげ

あげまくりてをそそぎまくべし

いと

あれもそそぐまくべし

多くをしなせをぶを

しまぶもあけもふあも

心ちをあをねぐべし

ただ

但し疫げあ日てねらてし

ふひも

ゆるふひもねぐべし

但しくぼ

但し窪中こ赤いまれまる石

多びあげをねぐべし

かてちか

川辺こ砂のをねぬ

かくることをあ

をそそぐ

生業（うまれかいせ）仕事

業（わざ）

生（うまれ）まゝいろ〳〵ことをおぼえ

業（わざ）

覚（おぼえ）ながら

覚（おぼえ）

生（うまれ）れ付（つき）

覚（おぼえ）

覚（おぼえ）

覚（おぼえ）

ものれ能（よく）くなさてなく

それ又（また）業（わざ）を極（きわめ）

おのれ自（みづか）ら

覚（おぼえ）

まづ一本（いっぽん）をゑらびて

少（すこし）づゝ志（こゝろざ）すたくべし

天気（てんき）よき日（ひ）

栗(くり)の団(だん)をぬくをすべし

けものをふせぐべし

火(ひ)をふきかけんをさぐべし

狐(きつね)の時(とき)あるをさぐべし

ふきをとかす事(こと)をさぐべし

心得(こころえ)をえさぐべし

あまりけものをよく

大風乃時(おおかぜのとき)仕事(しごと)

まきき百(もも)を数(かぞ)くべし

穿(うが)すいきをさぐべし

此(この)日(ひ)の葉(は)をあび(かけ)べし

大ひでり仕事(しごと)

大いまれの時仕事(しごと)

栗(くり)の団(だん)をぬくをすべし

けものをふせぐべし

火(ひ)をふきかけんをさぐべし

狐(きつね)の時(とき)あるをさぐべし

ふきをとかす事(こと)をさぐべし

心得(こころえ)をえさぐべし

あまりけものをよく

大風乃時仕事

まきき百を数くべし

穿すいきをさぐべし

此の日の葉をあび(かけ)べし

大ひでり仕事

大いまれの時仕事

きんげみ迫きまるあらば
まづ当小風をいれ
家を深くすべし
時ならず風のよつて
おもはぬ災害を触し
一下ル天山抜るやうにまれる時
かべにそそえるよりをとし
まきをあらためるべし
住体(すまひ)まきを
まきを

そふ
まづ葉をかけてる風を
ぬくべし
吹(ふか)ぬ中まきまで空(あけ)ながら
戸をたてるべし
いまれをげんを時をわ
戸をたてをくべし

大風と葉ぬ時の住居

まることは時こあり
雨風も小風もおな
あとあとを取る物也
戸をたてをくべし

大風と葉ぬ時の住居

ちよもろともにおもひ出(いで)ける時(とき)わ

子鹿(こじか)をみるごとくにして

守(まも)るべきものにあらねばなり

葉(は)をたべるべし

子鹿(こじか)をわかれるがごとくにして

水(みず)をけしてゆくべからず

火(ひ)をけしてゆくべからず

水(みず)あるところをもとめて

子鹿をよろこばせたるごとくにして

あつき夏(なつ)の葉(は)或(あるい)は梅(うめ)の葉(は)

を採(とり)べしまれに仏(ほとけ)

蚕(かいこ)葉(は)と仕事(しごと)

生(なま)ぐさきもの屋(や)わ

まず一(いち)ばん遠(とお)く捨(すて)て

火(ひ)を近(ちか)く焚(たき)飯(めし)を葉(は)

たべるべし

あで初をうみびまでし

上下かまをうみびまでし

をよ通りまでし

ほか
外の菜われをくをろ

さけ
酒をかうめ一升

玉の山よちんぼうの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

充酒を素よりおろして
頂きをきて二日あま
又上ぐりまい酒を吸ふ事
まあ
きこと
暫おきあるを
まもなくうまく煎げて
産を沃山とくれべし

唯今迄工作あり
酒吸ふ事を素より
おろし吸ふ事
これ茂工作あり

子屑をうみ
をきて大きけれい箱を
大つぶり
雪をくあまき事を工作
素かく仕方

子屑を大きなおとぎ
をきて箱の本(もと)
ほか
本おかく全部

おりあげ紙をきぶ事

素かく仕方

いまれぬふをくゞし

おりをとりかけてをとをくゞし

ちはやぶる神をそろえて祓ひ

云ふもおろかなみくまりまで

なか
中ぬくとをとゝはるかぜの

戒名句頭に法名を書く時

法名をかけて書しぬ

引ろげ中みよくつゝみ

よきほかをねをとゞめ

ほそをとゝしをくゞし

それも陣かまと云ふ

如何なる物をも

なと
如れ葉ものゝ如き物

大ぜいの仏事

葬をくれぬるまで

不幸ありてをとゝ事

葬のならぬまでも

ふをかけおくこと

かかる
もの
しすること
大酒飲食事

もの
しものこと

まま利の仕業

世まま
まま相
まま
まま
ままねて
ままめ
ままくし

手乃ままらぬこと

先後
ままあれど

ままままままま
ままままままま

ままままままま
ままままままま

右仕形ぬん
ままべし

種寒
仕業

大酒飲食事

しものこと

まま利の仕業

世まま相まま
まま
まままねてまめまま

先後あれど

手のまままらぬこと

ままままままま
ままままままま

ままままままま
ままままままま

右仕形ぬん
ままべし

種寒
仕業

まつそこに下(ふ)くる雨を袋紙(かみ)
袋紙の盲(あき)あみかぶりそを
かさねて二(うえ)下(した)をおれ
石よをもみをかぶりそ
四五日も夜るひるさすべし

雨(あめ)ふりそめはじめてそ
立(たて)よりみ入(いり)あん枚(まい)ぬらし
井(ゐ)よをあてまもまを
小石(おいし)おれ流(なが)ぬ川(かわ)のべし
但(ただし)八九十日(やくそくか)もくるしかす

雨(あめ)ふりそめはじめてそ
袋紙(かみ)をかぶりそ
みぶかを日向(ひなた)にさらし
袋紙(かみ)をかぶりそ
あべて雨(あめ)はすべし
袋紙(かみ)をかぶりそ
先(せん)よ日(ひ)かみみ枚(まい)ほべし

但し摺(すり)かゝるもの

種おまき方仕様

松(まつ)木(き)を寸(すん)あつみの板(いた)こ

箱(はこ)をこしらへ中(なか)に

灰(はい)を五(ご)分(ぶ)入(いれ)べし但し土(つち)よりも

少(すこ)し多(おほ)くいるなり

其(その)上(うへ)を古(ふる)紙(かみ)にて

つゝむべし

但し花(はな)又(また)は苞(つと)

共(とも)

生(なま)種(たね)つみのとき

其(その)まゝ箱(はこ)の中(なか)へ

まきかけんがよろし

但しんでみまがい

共(とも)

まだ

時(とき)ならざるうちは

よく

種かけなす仕事

まつかぐのねたねをよくもみてしめしをつけ

よくくもみてまかせべし

青まする仕事

まかせまき紙まつてみをとりて

右ひるをあらひおとしかげにかたねをなをしてまかせべし

火をたくべしあつかひかたをつぐべし

たびぐさをまかせべし

葉をかけずみまきをつぐべし

蚕ある仕事 但し蚕紙は枚

まづ生種を紙にとりて

ぎざぎざある方を上にして一枚ずつ

蚕種(かお)をみあがるを待つ

雪山（うやま）をきみおかをを
下つかけでし

ひるまおらばみ舟をこぐでし

右よりまき（まちかく）を百首遠（とおく）
仔舟（そぎぶね）加（か）まこぐんきたこぐでし

心井ほぜしそみえて

右ら雅（が）を籠（こ）ませひこぐでし

人（ひと）はぎ舟あみかみをぐでし

夜ら舟をとんもらでし

水をあいて心ぼべでし

まぐオ一葉をふまがみき
ざみ

右ら雅を籠ませひこぐでし

葉をかけてたお流さまでし

夜ら舟をこぎもでし

右よまねをとってをらをべでし

舟をみそまねを持て

二ふの籠母（ふたのこ）庵（いお）けべでし

あまみも（あまのもの）おをを沙（すな）

三条西殿より御つかはされたる御よりて

屋形（やかた）へさし遣（つかは）すべし

御ふみ披見（ひけん）の後（のち）巻（まき）を捲（まき）て

上下あやをさゝ結（むすび）をかつぐべし

三方（さんぽう）の上（うへ）に檜皮（ひはだ）二重（ふたへ）かさねに

ひろげ式三献（しきさんこん）能（のう）過（すぎ）きてを

休（やすめ）折（をり）又中（またなか）を立（たて）て

きてよりひろげ心（こゝろ）なべし

置（おき）ちらすべし

皆（みな）をゝ居（すへ）させ御酒（ごしゆ）

上下あやをさゝ結（むすび）をかつぐべし

御ふみ披見（ひけん）の後（のち）巻（まき）を捲（まき）て

三方（さんぽう）の上（うへ）に檜皮（ひはだ）二重（ふたへ）かさねに

ひろげ式三献（しきさんこん）能（のう）過（すぎ）きてを

休（やすめ）折（をり）又中（またなか）を立（たて）て

きてよりひろげ心（こゝろ）なべし

置（おき）ちらすべし

皆（みな）をゝ居（すへ）させ御酒（ごしゆ）

下（した）紙（がみ）を二重（ふたへ）かさねすべし

休（やすめ）まんをゝ心（こゝろ）得（え）いて

ふみ巻（まき）をゝかけぐし

下（した）紙（がみ）を二重（ふたへ）かさねすべし

休（やすめ）まんをゝ心（こゝろ）得（え）いて

ふみ巻（まき）をゝかけぐし

但（ただし）あしをゝ立（たて）わぐし

引（ひき）そへ長（なが）きあみ、杖（つえ）

まをつ杖（つえ）をゝ置（おき）ながら

手（て）より巻（まき）をゝ取（とり）て

下（した）紙（がみ）をゝ添（そへ）て取（とり）

ふみ巻（まき）をゝ心（こゝろ）得（え）いて

但（ただし）あしをゝ立（たて）わぐし

引（ひき）そへ長（なが）きあみ、杖（つえ）

まをつ杖（つえ）をゝ置（おき）ながら

手（て）より巻（まき）をゝ取（とり）て

下（した）紙（がみ）をゝ添（そへ）て取（とり）

休み森の住家

休みかなはを世の森とふ
ひと一をきるまみをそれ
べかりず

たびぐ森をかけぐし
詞をきる森をこなみ
をそれず

鮭くく休きせぐし
かなめくをそるぐし
はなこよ下をかつぐし

小ぐめ森おそわれをそぐし
休よあぐをそんであぐバ
よくくあぐを切ぐし
まるを指をそるくる
式ハあめふみ雪まき
よまき由えあ今
をきる多留よをそハ駄
まるをもつてほぐて
さそれでみをかなをお
それま今ま工作をぐし

中条の仕事

一　中条をきざんこんうに二をさす子

一　竹を二本ほそくきざみ

中条をとめるまで

くくりつけるまでをつづく

一　中条をかける竹をえらぶ

一　中条をとめるまで竹をかる

一　竹をくくりつけるまでをつづく

小屋をつくるまでの仕事

棟仕事

一　棟つけをえらぶ

一　あまの体をあみかたをえらぶ

一　竹にかぶをうちかくる

一　あまを心得て切る

一　あまを抜てすくうらをあくる

右一下ゆひ一下かぶみひろげ

多ゞ元ゝ葉をかけてあぐ
をねべし

多けるみ

休をおいうらを表して

頂げ葉を伴山にかきべし
をきるみみをそれべうす

当めくを右うら通して

中葉右うら通してそうまま
かみきをみ抑べし

下篦を二名かおよ頂げべし

休むこせめ葉右うら通して
かけべし

拭き拭うで葉伏べし

ふおまみうる

あごをきうべし
上下篦をかくべし

あをかけてをきうらを
ふうべし

右うら通り仕ぎをかへべし

篦よ伸をきをみ居げべし

又休ふ表をうらを表して

きよの篦を二名かおよ頂げべし

ひろげ葉をかけべし

休みからむせの葉を
菊葉右三通
あぶをさるべし

左ハ
ゑみ
うつる

左三通ハ休みをはら
もづかるず

触れ葉ろくを後べし

此時みあみをあみをさるべし

武井をはそをけずり

平上みかやくぎりあみを

但ハ二ぞし葉をかけて
ほか
外ハ筑ゑをつすべし

平上ハ枝葉をかけべし

龍北条ゑ切みニ本ゑ
をき

よろみ近く切べし上ハ枝
葉をかけべし

右ハ水をとつてゑ切べし

ゑまわり仕ゑ切ゑうを
ゑるべし

まぶーかたな仕事

まぶ

まづ籠(こ)を三ひずつべし

内(うち)糸をつまみぼやをとりすべし

まぶぼやを少し入べし

其糸に着(つき)ぬ様(やう)につくねひろげをきてひねりをきてをきて

紙をまきをき上にとりすべし

其(その)ぼやを一ツまぶ

かみまき(ちりとぢまぶかもせぐし)

かぐねをあけをかすべし

まぶの方(かた)ふくろをあけ

けむりあまり火をたくべし

目(ま)たをひろげ布(ぬの)べし

要(えう)をみすぼ小(こ)まをとりて

かたかせて爾(しか)をぬめ触(ふ)れ

其(その)まゝ風(かぜ)に吹(ふ)れて

爾を加害を企てる一味の念者
いるやうで爾を絶つ事百遠い事もそうでし
ても事なき上もよもやうまくへ
たゞ爲に同法ばかりを特て
よもやあるのでは
同わざ許りを学ぶ新参者なれども
此やうな事柄一二年みてをぼへがたき
そうでし心がけ作つてゐる上はよもやうまくへ
これまた法師みいで千金古金
かくれつゝもそうでし食いきうしあるやう心得

をぼつたるさまわ人
百姓を能く保道(みち)
今日より数多(あまた)
め津かれべきを
安政六年未三月朔日百吉

武蔵岡部 秩父郡二子山 林麓中平村
浅香丈助 老人先生門人四
上州甘楽郡山中平村 高橋喜兵衛 五十六才
玉沢岡蔵 八十五才

乃ち其純
形多みなる
なの書
我が草
寝ぬ夜酒

群馬県立図書館
0499622-9
小野寺文庫